

# 映画にみる“みち”

平成14年11月11日 運輸政策研究機構 大会議室

1. 講師 羽生次郎 (財)運輸政策研究機構国際問題研究所長

2. コメンテーター 廻 洋子 淑徳大学講師

3. 司会 中村英夫 (財)運輸政策研究機構運輸政策研究所長

## 講演の概要

### 1 はじめに

以前私はこのコロキウムで「シネマと鉄道」というテーマで話をさせていただいたが、鉄道は、脚本家や監督が思い入れを強くもって描く場合が多く、比較的やりやすかった。これに比し、「みち」は全ての映画に出てくる一方で、ほとんどが背景としてのものに過ぎず、作り手の思い入れが少ないのでテーマとして取り上げるのが難しい。

### 2 映画の中で「みち」がうまく何らかの役割を果たしている例

このような中で、まず、「みち」が背景として比較的うまく使われているもの、又は単なる背景としてではなく、「みち」が映画の中で積極的な役割を果たしているものを紹介したい。

#### 2.1 イージーライダー

1969年製作の映画である。1970年代はヒッピー、ドラッグ、フリーセックス、

ベトナム反戦、そしてライダーに象徴されるように、自由な生き方がもてはやされた時代である。この映画は、ライダーが麻薬で儲けたお金で生きていく中で現実社会との間で生まれる軋轢を描いたものである。冒頭のシーンで、「みち」は、そのような自由な走行空間としてうまく使われているが、ひとたびライダーがホテルに行くと宿泊を断られる。「自由」と現実との葛藤をうまく表現している。

#### 2.2 駅馬車

1980年代に入り、例えば「ダウンバイロー」が別れの背景として「みち」をうまく使っているが、もっと古典的に「みち」を別れの背景としてうまく用いた典型例が、この映画である。騎兵隊に送られる駅馬車が、命令に従う騎兵隊と別れ、別の道を行かなければならないシーン。別れを惜しむ士官の表情が次第に暗くなっていくのは印象的である。監督ジョンフォードが別れに「みち」を用いたうまいシーンである。

#### 2.3 テルマ&ルイズ

もう少し、「みち」に監督や脚本家などの情熱が入っている例として適当なのがこの映画である。監督はリドリースコット。エイリアンやブレードランナーなどで有名だが、最近では売れっ子になってしまい、グラディエーターやブラックホーク・ダウンなどのアクション映画ばかり撮っている。この映画は、女性が男性社会を暴力で打破し、最後には自滅するというウーマンリブの映画である。当時あまり注目されなかったのが残念だが、広大な大地に横たわる鉄道と「みち」を俯瞰するシーンなどは、女性の開放感をうまく表現している。

#### 2.4 道

この映画では、「みち」が人生の奇跡や人の生き方という意味で用いられている。1954年、フェリーニの4作目に当たる。その後、彼の映画は「カピリアの夜」「甘い生活」「8 1/2」と変化していくが、この映画は「青春群像」と同様、イタリアンネオリアリズムの影響を受けた最後の映画であり、後年の作品のような幻想シーンは少ない。ロベルト・ロッセリーニ監督の「無防備都市」の脚本をフェリーニがやっているように、彼はヴィスコンティと同様、ネオリアリズムの影響を色濃く受けた。善玉の権化ジェルソミーナと世俗の権化ザンパノとが異なる道を進んでいく物語。ジェルソミーナが好意を寄せるサーカス芸人を殺したザンパノが、ジェルソミーナを置き去



講師：羽生次郎



コメンテーター：廻 洋子

りにして逃げるシーンで、「みち」が二人の人生を表現するものとしてうまく使われている。最後はザンパノが自らの罪の深さに海岸で酒を飲んででもだえ苦しむシーンで終わる。

## 2.5 惑星ソラリス

これは、名画の中での「みち」の表現の失敗例である。1972年ロシア監督タルコフスキーのSF名画。21世紀、惑星探検隊が人間の思考を物質化したり、観念を映像化する力がある海を持つ惑星ソラリスにいくというストーリー。21世紀の近代都市を表現するのに、こともあろうに首都高を走行するシーンを5分ほど用いている。当時首都高というのはまだ新しく、未来の近代都市の疎外感や薄気味悪さを表現するのによかったのだろうが、今になってみると、また、日本人の我々からするとどうかという気がする。

## 2.6 そして人生はつづく

さらに、「みち」がかなり監督の思想を象徴化している映画がこれである。イランのアッバス・キアロスタミ監督のいわゆる「ジグザグ道三部作」の第二作。第一作目の「友達のうちはどこ」は、小学生が忘れた教科書を苦労して友達に届ける物語。第二作のこの映画は、90年の大地震で被災地となった「友達のうちはどこ」のロケ地を、監督が息子と共に訪れるというドキュメンタリー風映画。ジグザグ坂道を上っていく第一作の出演者を車で追っていく最後のシーンでは、山あり谷ありで様々なことがあるが人の力を借りながら進んでいく人生そのものを、「みち」が象徴している。第三作の「桜桃の味」は「うなぎ」とともにカンヌ映画祭グランプリを取ったが、これにもジグザグ道が出てくる。これに比べアメリカ映画の道はいずれもまっすぐというのは面白い。

3 映画の中で「みち」が一つの地方や街を象徴化している例

2. とは異なるもう一つの流れとして、「みち」(遊歩道や橋などを含む)を映すことによって一つの地方や都市というものを象徴化してしまうという映画の流れがある。

### 3.1 タンゴそしてガルデラの亡命

アルゼンチンとフランスの合作。あまり有名ではないが、マリー・ラフォレとマリナ・フラリーという1950年代から60年代に大変有名になった女優が出ている。アルゼンチンのパリにおける亡命者の映画。映画自体それほど良い評判を受けなかったが、最初の3分でパリがうまく表現されている。パリとタンゴがミスマッチせずなかなかのものである。映っているのは橋と川でないかと言う人もいるが、「みち」というのは単に車が通るところではなく、遊歩道もそうだし、橋も川も含めて「みち」であると思う。

### 3.2 あの子を探して

この映画は映画としても良くできている。監督はチャン・イーモウである。彼が「紅いコーリャン」や「黄色い大地」を撮ったときはうまさよ!も迫力を感じた。だんだん撮り方が「あの子を探して」や「初恋のきた道」になると、欧米などの外国人をどこで泣かすというのがうまくなってしまった。家が貧乏なため都市に働きに出た小学生を代用教員が歩いて探しにいくというストーリーだが、村の道、町の道、そして都市の道のシーンへと変化し、いかに代用教員が長い道を苦労して探したかを、疲れている表情とかを写すのではなく、うまく表現している。ヴェネチア映画祭でグランプリを取った作品。

### 3.3 ウェストサイドストーリー

決闘のシーンでは、高速道路の下の

殺伐とした雰囲気がよく出ている。トゥナイトデュエットの後で、高速道路下で決闘が始まり、それにより何人が殺され逃げ出すシーン。高速道路下の赤いむき出しの鉄骨などは、都会の殺伐さや孤独感、冷え冷えした雰囲気を良く醸し出している。

## 4 最後に

このほか、ハイウェイの停留所をとったものとして、マリリンモンローの「バス停留所」や「郵便配達は二度ベルを鳴らす」「ヘッドライト」などがある。

いずれにしても「みち」は基本的な生活手段、社会資本であり、「家」と同じように、正面から取り上げる人もいないし擬人化できない存在である。よく撮られているが思い入れを込めたものや象徴化されたものは少ない。一番多いのは「駅馬車」「イーゼーライダー」のように効果的なバックグラウンドとして「みち」を使っているものであり、他にも「カピリアの夜」のラストシーンや「水の中のナイフ」などが優れている。何れ、またの機会にご紹介したい。

## コメントの概要

映画の締めくくりとしての「みち」について述べたい。「みち」の映画として一番最初に思い出すのは、ジャン・コクトーが監督した「オルフェ」だが、オートバイでジャン・マレンをはねるといふ鮮烈なシーンは残念ながら冒頭のシーンである。

## 1 第三の男

グレアム・グリーン原作、キャロル・リード監督の作品。無駄なシーンが全くなく、完璧な映画教科書とも言うべき作品である。三文小説家ホリー・マーティンが親友のハリイ・ライムに呼ばれてウィーンに行くが、彼は交通事故で死亡したと聞かされる。真相を突き止めるうちに、麻薬などの闇市場の大物である

ハリーが当局の追求を免れるために死を偽装していたことがわかるというサスペンス。ジョセフ・コットンがずっと出演しているが、本当の主演は出てこないオーソン・ウェルズ(ハリー)、アントン・カラスのオストリーの民族音楽チャターのテーマ曲が印象的だが、もう一つの主演はウィーンの街である。荒廃したウィーンの街が陰影深く非常にうまいカメラ取りで出てくる。最後の「みち」のシーンはあまりに有名。ハリーの葬式の後、友人だったジョセフ・コットンはアメリカに帰ろうとするが、ハリーの愛人アンナ(アリタ・パツリ)に未練が残り、空港に向かう途中で彼女を待ち伏せる。アンナは、枯れ葉の舞い散る「みち」を遠くから歩いてくるが、ジョセフ・コットンには一瞥もくれず通り過ぎていってしまうシーンである。アンナは偽のパスポートをもった不法滞在のチェコ人で孤独な役柄であるが、このシーンの冷え冷えとした雰囲気は、彼女がこれからさらなる孤独への道に向かう心象を表すものである。

## 2 アラビアのロレンス

デビット・リーン監督の1962年の映画。完全版は88年に公開された。最初のシーンは引退したロレンスがバイクの事故に遭うシーン。最初と最後が「みち」である。第一次大戦中、ロレンス中佐は、ドイツの同盟国トルコの勢力を削ごうとし、アラブの民族自決に向け、アカバを攻略しダマスカスに入場する。最終的にはロレンスは政治に翻弄されてしまい目的を果たせず国に帰っていく。最後の埃だらけの「みち」をロレン

ス(ピーター・オトゥール)がジープで戻っていくシーンは、すっかり人生を消化してしまった彼の寂寥感をうまく表現している。「みち」の途中で彼はラクダに乗ったアラブ人の群とすれ違う。ロレンスの胸はかすかに騒ぐ。思わずジープから立ち上がり思わず彼らを振り返るが、今ではロレンスには関係のない光景だ。ロレンスは何も言わず座り、ジープは「みち」を走り続ける。そこでTHE ENDの字幕、タイトルバックが流れ始めると突如気持ちは高揚させるような、リズムカルな音楽が流れ出す。そこが実に良く出来ている。

## 3 天井桟敷の人々

1945年、マルセル・カルネ監督のフランス映画。音楽はジョゼフ・コスマ。出演はアルレッティ、ジャン＝ルイ・バロー、マリア・カザレス。1840年代のパリの歓楽街を舞台に、パントマイム役者バチスト(ジャン＝ルイ・バロー)と女優ガランス(アルレッティ)の恋を軸として、様々な人間模様が描かれる絵巻のような映画。二部構成となっており、一部が「犯罪大通り」、二部が「白い男」。巨匠マルセル・カルネは戦争中に3年3ヶ月の日数を費やしこの作品を完成させた。パリの開放と同時期に上映されたが、フランス人のエスプリは生きていて人々は熱狂し54週間のロングランになった。最初と最後が幕でつながっている。第一部は舞台の幕が開いて犯罪大通りが出てくる。フランスの「みち」にはRueやAvenueやBoulvardやAutorouteがあるが、その中のBoulvard(大通り)は、歩く通りという

よりは人々の集う広場のような役割である。そこに人間模様を重ねている。運命の恋を交わらせ結ばれたガランスとバチストが別れる日の朝、広場でカーニバルがピークに達している。人生はカーニバル。広場のような「みち」はその人生の舞台、劇場としての役割を担っている。イタリアやフランス映画はカーニバルで終わるのが多い。

あまりに演劇的なため、フランソワ・トリュフォーは、これは映画ではないと批判した時期もあった。実際、ジャン＝ルイ・バローやピエール・ブラッスールは舞台の役者である。脚本はジャック・プレバールで演劇的な言葉は美しい。

## 4 モダンタイムス

最後は、「みち」が未来へ続くという例である。1936年、監督、音楽、主演は全てチャップリンのアメリカ名画である。一時、「自由を我等に」というルネ・クレール映画と似ているということで批判された。チャップリンは近代オートメーションの中の職工役であり、職業病でおかしくなっていくが、彼流のギャグがうまく文明批判になっている。途中デモのリーダーと勘違いされたり、刑務所に入ったりしながらも、最後は浮浪児の女の子と知り合いになり、レストランのウェ이터兼歌手として働くが、そこへ刑事が...。最後、二人でこやかに長い「みち」を歩いていくシーンは、様々な困難と戦いながらも前向きに進んでいく二人の未来を表している。サイレントとトーキーが混ざっているのもおもしろい。

(とりまとめ: 運輸政策研究機構 長瀬友則)